

用語説明 Glossary
(五十音順)

アイソザイム：機能的には同じ酵素タンパク質であるが、アミノ酸の一部が置換していることにより電荷が異なり、電気泳動で識別されるものをさす。比較的容易に遺伝的多型が検出できるので集団間の遺伝的分化の指標としてもよく用いられる。

青谷上寺地遺跡（あおやかみじちいせき）：鳥取市青谷町青谷で見つかった弥生時代の集落跡で、多くの鉄器、木製品、人骨などが見ついている。2000年には人骨に脳が残っていることわかり話題となった。

亜高山帯（あこうざんたい）：ブナ帯より上に成立する森林帯で、ダケカンバなどの落葉広葉樹やシラビソなどの針葉樹林で構成される。中部地方以北の本州や四国の高山にはみられるが、中国山地には存在しない。

亜種（あしゅ）：同一種であるが、分布域の異なる複数の集団が何らかの外部形態形質で互いに区別できるとき、それらに正式な学名をつけて区別している場合がある。それを亜種という（これは動物分類学で用いられる亜種の定義であって、植物の亜種は意味が少し異なるので注意）。

例) *Chamalycaeus nakashimai nakashimai* Minato, 1987 クビレイトウムシオイガイと *Chamalycaeus nakashimai ditaceus* Minato & Yano, 2000 ヒョットコイトウムシオイガイは互いに同一種（現在は別属に移されている）の亜種。最初に新種として記載されたほうの特徴をもつ亜種を基亜種または原名亜種とよび、種小名と亜種小名が同じになる。植物では、亜種は種と変種の間ランクとして位置づけられ、学名では亜種小名の前に subsp. をつけて表示する。

雨覆（あまおおい）：鳥の翼の風切羽などの基部を覆う羽。初列風切を覆うのは初列雨覆、次列風切を覆うのは大雨覆で、さらに、大雨覆を中雨覆が、中雨覆を小雨覆が覆う。

移行帯（いこうたい intergradation zone）：交雑帯と同義。交雑帯は、厳密には、以前は異所的であった2つの集団が二次的に接触してできたものを指すが、生成過程の推定は困難であることが多く、近年は「移行帯」と「交雑帯」という2つの用語はあまり区別されない。

移行帯（いこうたい ecotone）：エコトーンを参照。

異所性（いしょせい）：allopatry。2つの種が互いに分布域を違えていること。その状態のとき、その2種の分布は「異所的」である、などと表現する。

異数性（いすうせい）：染色体数が集団内でその生物の本来

の染色体数と1～数本異なること。染色体の不分離（これで生じる異数性個体は何らかの異常をとともなうことが多い）や、B染色体の存在などで起こる。

遺存種（いぞんしゅ）：かつては連続的に分布していたが、その後、何らかの理由で分布域の後退が進み、限られた地域に隔離的に分布するのみになっているような種。

銀杏羽（いちようばね）：オンドリの雄の側面から上方に突出してみえる橙色のイチヨウの葉の形の羽のこと、三列風切の1枚に相当。

遺伝子汚染（いでんしおせん）：外部からの同種の移入集団との交雑によってある集団の遺伝子プール（全遺伝子の集合）に外来の遺伝子が流入してその集団本来の遺伝子構成が乱れること。

クイーン：社会性昆虫の女王のこと。

エコトーン：移行帯ともいう。2つの生物群集（とくに植物群落）または2つの生態系の境界に生じる移行域のこと。たとえば林縁は森林生態系と草地生態系を仲介するエコトーン、水辺は河川あるいは湖沼生態系と陸上生態系のエコトーンとなる。このような場所では一般に生物の種多様性が高くなる。

ND5 遺伝子（えぬでいふあいぶいでんし）：ミトコンドリアのDNAにあるニコチンアミドデヒドロゲナーゼサブユニット5 遺伝子の略。ミトコンドリアの遺伝子としては比較的長く、進化速度が速いため、種内の集団間や近縁種間の系統解析によく用いられる。

mtDNA：この「mt」はふつう「エムティ」ではなく「ミトコンドリア」と読む。「ミトコンドリアDNA」を参照。

過眼線（かがんせん）：くちばしの付け根付近から眼をとおって後ろにのびる細長い斑紋。ふつうは黒または暗色。

学名（がくめい）：ラテン語（またはギリシャ語語源のラテン語）で記述され国際的に使用される学術上の名称。Crustacea（甲殻綱）、Decapoda（十脚目）、Majidae（クモガニ科）などはいずれも学名である。ズワイガニという和名の種の学名は *Chionoecetes opilio*（ズワイガニ属を表す *Chionoecetes* はギリシャ語で「氷雪の住人」という意味。種小名の *opilio* はやはりギリシャ語の名詞で「羊飼ひ」または「ザトウムシ」の意味）で、これはつまり「ザトウムシのように足が長い雪の住人」という意味となり、ズワイガニの形態や生息地

をうまく表現している)。本書では原則として、種の学名にその学名の著者名とその学名の出版年を合わせて表記した。動物では、これが括弧つきで表示されていれば、その学名は原記載以後、属の所属が変更されていることを意味する。植物ではこの場合、原記載の著者名を括弧内に入れ、さらにそのうしろに転属をおこなった論文の著者名を表示する。著者名の前に単語が3つ並んでいる場合、動物では3番目は亜種小名を示す。植物では亜種、変種、品種の小名の前には、それぞれ「subsp.」、「var.」、「f.」がつく。

風切羽 (かざきりばね)：鳥の翼の後方に整列する一連の羽根のこと。飛行に重要な役割をもつ。

下尾筒 (かびとう)：鳥の尾のつけねの下側。

河川残留 (かせんざんりゅう)：本来は淡水と海水の間を回遊する魚が、海に戻らず淡水域で一生を過ごすこと。一代限りでなく、代々そのような生活を繰り返すようになった魚はとくに陸封魚(りくふうぎょ)とも呼ばれる。

河川争奪 (かせんそうだつ)：隣接する河川間で、一方の河川が他の河川との分水界を浸食して、他の河川の上流域を支川の一部に組み込むこと。

冠羽 (かんう)：鳥の頭頂部から突き出るように生える長い羽根のこと。

極相 (きょくそう)：遷移の最終段階にあらわれ、攪乱のない限りそれ以上、他の植生に変化しない植生のこと。極相がどのような植生になるかは場所によって異なり、鳥取県の平野では極相はタブノキやスダジイなどの常緑広葉樹林、1000m以上の山地であればふつうブナ林になる。

菌核 (きんかく)：菌類において、環境条件が悪いときに休眠のため菌糸体が結合して硬くなった組織。

近交弱勢 (きんこうじゃくせい)：近親交配を繰り返すことで、劣勢有害遺伝子がホモ接合になって発現する頻度が高くなるなどの理由で、妊性や産卵(産仔)数の低下、生活力の低下などが起こること。

クライン：ある形質が地理的な勾配をもって変異するとき(たとえば、生息地の標高が上がるにしたがって体のサイズが順次減少するような傾向のみられるとき、この傾斜をクラインという。

原生林 (げんせいりん)：攪乱を受けず極相になった林のこと。⇔二次林。二次林も長年攪乱されずやがて極相に到達すれば原生林となる。

交雑帯 (こうざつたい)：ある形質で区別できる分布域の異なる2つの集団の分布境界で、その形質に関して両者の中間状態を示す個体がふつうに見つかる場合、これを交雑帯(または移行帯)とよぶ。染色体交雑帯では、たとえば染色体数が $2n=18$ の集団と $2n=20$ の集団の交雑帯の中にある集団では $2n=18$ 、 $2n=19$ 、 $2n=20$ の3者がいろいろな頻度で見つかる。この場合、もし両者の間に生殖隔離が発達していて $2n=19$ の雑種個体がいたととしても、それが偶発的に生じたきわめて稀な個体、それはふつう交雑帯とはよばない。

個体群 (こたいぐん)：集団 population のこと。ある場所に見られる同種の個体の集合。

固有 (こゆう)：その地域にしか分布していないこと。日本固有種は日本にしか生息せず、国外のどこにもみられない種のこと。鳥取県固有種は鳥取県以外には分布しない種のこと。で、「県内の生息地の絶滅」が、即「種の絶滅」を意味する。

ゴール：虫こぶ、虫癭(ちゅうえい)ともいう。植物寄生性の昆虫やダニなどが寄生することで植物の組織が肥大してできるこぶ状にふくらんだ構造物。

さえずり：繁殖期に雄が雌に求愛するときに出す、独特の鳴き声。

三列風切 (さんれつかざきり)：風切羽のうち体にもっとも近い位置にあるもの。上腕骨についている。

子実体 (しじつたい)：菌類において胞子を形成する組織。菌糸でできている。

耳石 (じせき)：魚類の内耳にある炭酸カルシウムからなる石状の組織で、断面に年輪がみられ、年齢査定などに利用される。

地鳴き (じなき)：さえずり以外の鳴き声。単純で短い。

種 (しゅ)：自然状態で他の種からは生殖的に隔離されている、少なくとも潜在的には互いに交配が可能な個体の一群。

小雨覆 (しょうあまおおい)：鳥の翼の中雨覆を覆う雨覆で、翼をたたんでいるときには鳥の肩のあたりにみえる。

上尾筒 (じょうびとう)：鳥の尾のつけねの上側。

初列風切 (しよれつかざきり)：翼の骨格に直接くっついていて大きくてかたい羽(風切り羽)のうち、ヒトの手の平に相当する部分の骨についている羽をさす。ふつうは10枚。

飛行時には推進力を生む。止まっているときは、翼の先端にみえる。

次列風切（じれつかざきり）風切り羽のうち、肘にあたる部分の骨につくものを次列風切という。飛行時には揚力を生む。

新成虫（しんせいちゅう）：昆虫で、越冬後の成虫ではなく、当該年の春以降に新たに羽化して出現した成虫のこと。

遷移（せんい）：ある場所の植生が時間の経過とともに自然に別の植生に移り変わってゆくこと。

全長（ぜんちょう）：哺乳類では口先から尾の先端（毛は除く）までの長さ（尾長をのぞいたものが頭胴長）。鳥類ではくちばしの先端から尾の先端までの長さ。

側所性（そくしょせい）：parapatry 2つの種（または同種の地理型）の分布域が異所的であるが、その境界が密に接している状態をさす。

代置種（だいちしゅ）：異所的（または側所的）に分布する近縁な2種が、共通祖先種の地理的分化によって直接に生じた姉妹種と考えられるとき、それらを互いに代置種の関係にあるという。代置種の集合は上種（superspecies）とよばれる。

タイプ産地（たいぷさんち）：模式産地、あるいは基準産地ともいう。ある種が新種として記載されるときに、記載文のもとになる1個体の標本（正模式標本）の産地のこと。これは分類学上のいろいろな問題を解決するうえで不可欠な情報であり、タイプ産地の環境は最大限保全されることが望ましい。

旅鳥（たびどり）：夏季はより北方まで移動して繁殖、越冬はもっと南方でおこなうため、その場所では春季あるいは秋季の渡りの時期にしか観察できない鳥。渡りのルートは春と秋で異なる場合がある。

単系統（たんけいとう）：単一の祖先から派生した子孫系統群をすべて含む一群のこと。哺乳類や鳥類は単系統の分類群であるが、爬虫類は、それらの共通祖先に由来するすべての系統群の中から、哺乳類や鳥類が除かれているので、単系統群ではなく、側系統群とよばれる。

抽水植物（ちゅうすいしょくぶつ）：浅い水辺に生え、根は水中の地皮下にあり、葉や茎の一部または全体が空中にのびている植物。ヨシ、ガマ、ハスなど。

沈水植物（ちんすいしょくぶつ）：根は水底に固着し、体の全部が水中にある植物（いわゆる水草）。クロモ、エビモ、シャジクモなど。

挺水植物（ていすいしょくぶつ）：抽水植物と同じ。

デトリタス：detritus。デトライタスともいう。落葉落枝などを含む生物の遺骸が堆積してできた有機物に富む土壌や干潟の泥などのこと。

同所性（どうしょせい）：sympatry。2つの異なる種が同じ場所で共存していること。その状態を「同所的に分布する」という。

鳥取県特定希少野生動植物（とっとりけんとくていきしょうやせいどうしょくぶつ）：鳥取県が定めた鳥取県希少野生動植物の保護に関する条例（2001年公布、2002年9月施行）でとくに保護を必要とする動物として定めた動植物種のこと。捕獲や採取が禁止され、また保護管理事業の対象とされている。動物はアカヒレタビラ（現在はミナミアカヒレタビラ）、ウスイロヒョウモンモドキ、カラスガイなど8種、植物はヒゴタイ、サクラソウなど33種がこれに指定されたが、2022年6月の公示で動物は7種、植物は32種の指定に変更された。

ドラミング：キツツキ類が樹幹をくちばしで叩くときに出る音など、鳥が鳴き声以外で出す音のこと。

夏鳥（なつどり）：他所から夏に飛来してきてそこで繁殖をおこなう鳥のこと。

二次林（にじりん）：一度、伐採された跡地に生じた林。⇔原生林

ねぐら：ねむったり、休息したりする場所。

年1化（ねんいつか）：昆虫やクモが年に1回の頻度で世代を繰り返すこと。

年2化（ねんにか）：昆虫やクモが年に2回の頻度で世代を繰り返すこと。

パー・マーク：サケ類の幼魚（ふつうは）の体側にみられる1列に並ぶ小判型の斑紋のこと。

ハプロタイプ：染色体の特定の位置（複数遺伝座）に密接に連鎖して存在する遺伝子または特定の連鎖している塩基配列の一群のこと。

バンディング：鳥の渡りの調査のため、脚輪で個体に標識をつけること。

ビオトープ：本来は「生き物が生活する場所」という意味のドイツ語の合成語 [Bio(生き物の)+Top(場所)]。その地本来の植生や動物相の復元を意図して設計・工作された人工的な造園地をとくにこのようによんでいる。

ピットフォールトラップ：地表徘徊性昆虫などの採集に用いられる落とし穴のトラップのこと。紙コップなどが利用される。

眉斑（びはん）：眼の上に横に伸びる斑紋。

飛沫帯（ひまつたい）：海岸の潮間帯のすぐ上の、波しぶきがかかるが、満潮時にも海面下にならない部分。

鼻葉（びよう）：キクガシラコウモリ科などのコウモリの鼻にある複雑なひだ状の構造物。

漂鳥（ひょうちょう）：渡りをしないが、夏季には高標高地に移動して繁殖、冬季に平地において越冬するなど、小規模の移動をする鳥。

富栄養化（ふえいようか）：湖や河川が、農地の化学肥料や生活排水に由来するリン酸塩や硝酸塩などの流入で栄養過多になる過程。アオコなどの大量発生を招き、酸素不足や毒素産成も生じて淡水魚などの大量死亡につながる。

冬鳥（ふゆどり）：夏季には他所で繁殖し、越冬のため飛来する鳥のこと。

浮葉植物（ふようしょくぶつ）：水底に根をはり、葉を水面に広げるヒツジグサ、ヒシ、ジュンサイなどの水生植物のこと。

変種（へんしゅ）：variety。植物で使われる種よりも下のランクで、種内に形態的形質で識別できる複数の型がある場合に使用される。学名では「var.」をつけて表示され、たとえばキャラボク *Taxus cuspidata* var. *nana* は、イチイ *Taxus cuspidata* の変種である（*nana* は、ラテン語で、「低い、矮性の」という意味）。

ミトコンドリア DNA（ディーエヌエー）：細胞内の呼吸装置であるミトコンドリア内に存在する環状の DNA のこと。その塩基配列は細胞の核内にある DNA より変異しやすく、同一種内の集団間や近縁種間で系統を調べるときによく用いられる。mtDNA とも表記される。

迷鳥（めいちょう）：本来の分布域でないところに迷って飛来した鳥。

迷チョウ（めいちょう）：本来の分布域でないところに迷って飛来したチョウ。台風などで受動的に遠隔地にまで運ばれるケースが多い。

目久美遺跡（めぐみいせき）：米子市にある縄文後期と弥生前期の双方の出土品を含む複合遺跡。

模式産地（もしきさんち）：タイプ産地を参照。

翼角（よくかく）：飛翔時の鳥で翼が前方に突き出してみえる部分。この部分は人の手首に相当する。

螺層（らそう）：巻き貝の一巻きのこと。螺層と螺層が接する溝状の部分を縫合という。

螺塔（らとう）：巻き貝の殻のもっとも下側の溝（縫合）から殻頂までの巻き上がっている部分。

留鳥（りゅうちょう）：同じ地域で1年中生活する鳥。実際には小規模の移動で季節により個体の入れ替わりがある可能性があるものが含まれるかもわからないがそれが検知できないかぎり、この名前で呼ばれる。

両側回遊（りょうそくかいゆう）：淡水で生まれたのち海に下り、産卵とは無関係に再び淡水に戻る。淡水産ハゼ類の多くやアユなどでみられる。

ワーカー：社会性昆虫の働きバチまたは働きアリのこと。膜翅目ではこれは遺伝的には雌であるが、ふつうは不妊で自分では子を産まない。

ワンド：河川敷内にあって河川本流と切り離されて止水の池や溝のようになっているところ。滞筋（みおすじ）ともいう。

（鶴崎展巨）